

朱(丹)を追え

ことのはじめ

きもきもの。ことのはじめは、夏休みの自由研究にある。中学3年生の社会科の自由研究で、「地域の歴史発掘」というようなテーマで、香寺町相坂の清瀬正寛さん(香寺町文化協会会長)の語りをもとに「聞きとり」をまとめるという形で発表していた生徒がいた。常峰さん、上月さん(女2人)である。そこに、ボクの興味をひく報告があった。香寺町の南に接する姫路市仁豊野の地名のおこりについてである。そこでは、清瀬さんの話により「仁豊野」ももとは「仁」←「丹」(赤土=辰砂=硫化水銀)、「豊」←「生」、「野」、でありつまりは「丹生野」であっただろうというのである。

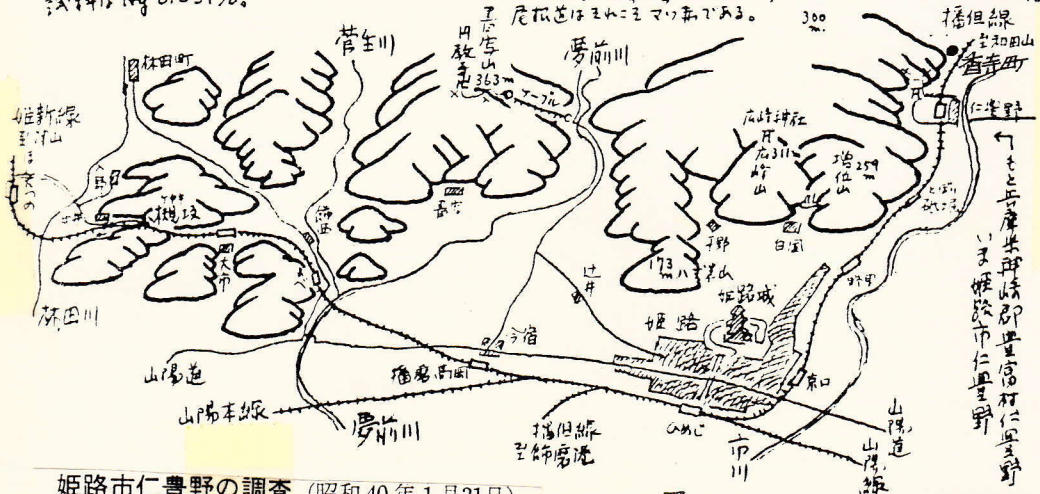
そこで、もともと「丹」(辰砂、硫化水銀)の産地であっただろうといふところから来ているのだらう報告であった。

姫路市仁豊野(にぶの) 電野市入野～香寺山～姫路市仁豊野 一帯にあり。

入野 電野市上入野、下入野(いりの) 川長39.8.30m調査中井部東樹校 4年分の竹林を築く山形と坪の 試料は1kg 0.051%。

香寺山 姫路市香寺山で山頂に「おんぼ」 遊覧地あり。ダラダラ山に山頂は 0.1%「おんぼ」の産地。産地十八ヶ所の石。 尾根の厚み2m 40cm。天保山(香寺山)の産地。 尾根は3m 30cm。マツノ山である。

仁豊野 表工の下は名所と赤土。 赤土の白い地味には不純物。ここには 産地が生れるところとこれに産地。 仁豊野は明かに仁生野(丹生野)。



姫路市仁豊野の調査 (昭和40年1月31日)

『古代の朱』松田寿男著
よつ

そう言えば、どこかで、そんな話を聞いたことあるなと終るところであ
った。後に調べた、香寺町土師の鎌谷 さん著『播磨古文化財の実証的
研究』には、次のように、このことに入れている。

附記Ⅱ 「仁豊野」の地名発想

(p224)

神崎郡 砥堀村大字仁豊野は、里俗「ニブノ」(Nifu-NO→Nibumo)
とゆんでいる。「仁豊野」の文意はこれに当てた婦宮で、「ニ(丹)+フ
(生)+ノ(野)」即ち、Nifu-NO→Nifumo→Nibumo(波行の清
者つが、フの濁音づとなる)で、ニ(丹)と結合した、所謂、複合語の
地名化である。上記は、仁豊野聚落の北辺、小宮宮、大八幡神社(寛文
五年八月本殿建立棟礼、記多人幡宮)裏の地層の存在から容易に確認さ
れる(最近、住宅の造成や住宅建設等の為、地親に著しく変化を来した
露出層の所在は聖域に覆われてゐる。)----- (略)

甕(はろう)とは

地名のことだけでは、「

なるほどな」と思っていたかも

知れぬ。その報告には、一枚の
写真がはりつけてあった。

その写真が、右の「甕(はろう)」
の写真であった。これは、今、
香寺町の中央公民館にあると
いう。清瀬さん寄贈のもので
あるという。

そして、これがなんと「丹」
=(硫化水銀)より水銀をとろけ
る器であるというのである。

話は、リアルになって来る。
中央公民館へは出入りしてい
るが、そんなものには気づか
なかった。さっき、科
学クラブの生徒に走ってまわ
った。そしたら、右図のよう



甕(はろう)

祭使用と実用があり、古代
水銀蒸溜器として朱砂を
めた器で横の穴は空気孔
である。日本は古代水銀の
特産地であった。

(科学クラブより
今井田君、清瀬君)

スケッチと、文を書きうつしてきてくれた。

また、この研究を発表した。常峰さん・上月さんには、清瀬さんのところで、さうにうれしい話を聞いて来れることをたのんでおいた。

丁度、また、このとき、「酸化水銀(HgO)の熱分解」の授業をやっているところであった。よつボク自身の興味をかりたてた。

学習会7つに

不思議なものである。どうしてこう

も話がうまく進むのでしよう。又しづりの学習会(9/27)で脱線話として「中央構造線」(題不名)NHKテレビのことが話題となり、空海がどうして唐野山に寺を開いたかは、このあたりが「水銀の産地であったこと、そして「丹」が、利尿剤等として唐産の「薬」(!?)であったこと、中央構造線と水銀産地との関係のこと等をやっていてことを教えてもらった。

(残念ながらボクはこれを見ていない)。

この話を聞きながら、「仁豊野」=「丹生野」のことを思い出したをしてバカげたことを言った。

「中央構造線と水銀地帯と関係あるんやったら、山崎断層と仁豊野は関係ないか、あそこはたしか山崎断層系の断層が走ってるはずや」と。ここはシロウトの独断、知ってることは、なんでも結びつけたりがる。でもこの自分の言ったコトバに、後々まで「こだわり」つづけるんやけど……。

ともかく、このときの話が心に染みこむことになる

「古代の朱」が

たのんでいた2人の生徒が本

を、清瀬さんより、2冊の本をかりて来てくれたのである。

ひとつは、『古代の朱』(松田壽男^{ミナモト}著、学生社)である。この本は残念ながら、今は絶版、再刊の予定なしという。もう一冊は、『奈良の大仏』～世界最大の鋳造物～(香取忠彦著、草思社)である。

前著『古代の朱』は、すごい本である。今、知りたいことが、全てつめ

込んでいるという感である。もちろん「大豊野→丹生野」のこと。強
(はきり)のこともでているのである。そのことに興味をもって清瀬さん
は読まれたのであろう。赤線が引いてある。

はしがきに、著者の次のようなコトバがある。

だいたい『丹生の研究』は、日本として、いや世界として、水銀を人
文科学の対象として取り扱った最初の書物だ。金・銀・銅・鉄などの歴
史については、いくつも出版されている。しかし、同じ金属でも水銀は、
縄文土器の時期、つまり日本人の生活と密着していた。おそらく朱(硫化
水銀)と砂金とは日本の石巻人が最初に手にした金属だといえる。
それなのに研究書が一本もなかったのは、いかにもふしぎに思われよう。
それは、古代の水銀に関する記録があきらかに乏しいからである。
その記録を駆使するにはキメテが必要だ。そのキメテを工夫するには、
従来の日本人の生活感情と因襲から、まことに困難だったのである。
私が神社を史料に使ったことは、まったく戦後でなければ不可能であ
ったろう。……………略

※『丹生の研究—歴史地理学から見た日本の水銀—』著者が
この本に先がけきとめたもの。早大出版部がら出ているらしい。
この本は、その本のエッセンス+α。

すごく納得させる文である。なるほど、「鉄」に関する本などはよ
く見るが、「水銀」に関してということになると、見たことない。

内容も、興味ある話が續々と続いている。研究も実証的で、読むもの
を「朱を追っての旅」につれだしてくれる。目次をあげるだけでも、
その展開の少しは読みとれると思うので……………

一、朱の世界 二、青丹にふし 三、さびね喰く
四、丹毒と輕粉 五、日本のミイラ 六、水銀の女神
七、丹生氏の植民 八、水がね姫の变身 九、漢宮から生きた神
十、丹生君野明神 十一、丹生と丹楳 十二、石鏡を考える

となる。どのように、水銀をとり出していたのだらう。「朱」として染
料との役割は、アマルガムとして、薬として、ミイラづくりに……………

「水銀」と人間の関わりが描かれている。この本によってさらに、朱
(丹)への興味は深まってきたのである。(つづく)

※ このあと、塩本裕さん(神戸)への連絡。そして、このことにすで
に、注目し追っている人(中谷隆夫氏(奈良))がいたこと。そし
ていろいろ教えてもらったこと。等々と発展しきき。次号へとつづ
きます。